

---

# 恋×陸上×幼馴染

みや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋×陸上×幼馴染

### 【Nコード】

N4698U

### 【作者名】

みや

### 【あらすじ】

季節は春。中三になった僕は親友が自分の幼馴染に告白すると言ってきた。しかし自分も幼馴染のことが好きで自分の取るべき行動が分からなくなっている。幼馴染は別に好きな人がいるらしい。なんとか幼馴染と付き合いたい僕は一体どうすれば！？

## プロローグ

僕が中三の頃の話だ。僕は恋をしていた。これはそんな僕らの話だ

僕の名前は村木<sup>むらき</sup> 咲良<sup>さくら</sup>だ。僕は典型的な理系で暗記科目は全然無理と言った感じだ。多分二度と忘れないだろう。歴史のテストで一桁台をとってしまったことを……

季節は春。僕は中三になったばかりだ。僕は朝の電車ホームに居た。暖かくなったなあなどと思っていると後ろからトテトテとこっちに向かって来る人物がいた。

「咲良、おはよっ！」

「おはよう、夏花咲」

僕に話しかけてきたのは幼馴染の宮原<sup>みやはら</sup> 夏花咲<sup>つかさ</sup>だった。整った顔立ちとロングヘアーの女の子だ。彼女とはもうかれこれ10年の付き合いだ。夏花咲と僕の母親は家が近所だったらしく時々挨拶を交わしてたという。そして僕らが幼稚園に入ったことで親同士の中がより深まり夏花咲とはその時からの腐れ縁だ。

僕達が通う学校は地元の駅から五つ離れていてそこから徒歩で二十分程で着く。僕達はいつも一緒に行ってた。中一ぐらいのときは周リから冷やかされたがいつの間にかそういう事は無くなっていた。そして今日もいつもと変わらず夏花咲と一緒に学校へ向かった。

教室に入るといきなり声がかけられた。

「なあ村木、宿題やってきたか？俺に見せてくれ！」

渡邊 わたなべ 和磨 かずま だ。こいつは中一の時に僕を助けてくれた事があり、そこから仲良くなった。成績はそこそ良いのにも関わらず宿題はやらずにいつも僕や他のやつから写させてもらっている。こうみえてもやるときはやるタイプなのでクラスからは一応信頼されている。

あれ……？

「宿題なんてあったっけ？」

「あったよ。忘れたのか？数学の問題集P6～12」

P6～12ですと？僕らが使っている問題集は一ページ約三十問載っている。すると7×30＝210……数学は今日の一時間目だった。

「今からやったって間に合わないよ！後十五分じゃないか！」

正確に言えばHRの時間も使えるので二十五分だが……それでも一分間に約九問のスピードで解かなくてはならない。

「咲良、私の写す？」

「写す！」

即答だった。今の僕に躊躇してる暇は無かった。持つべきものは幼馴染だ。

「まてずるくないか？」

和磨がなんか言ってるが気にしない。僕は太急ぎでノートを写していった。

「ま、間に合った」

「良かったね、咲良♪」

「ああ、ありがとな夏花咲」

数学の時間が始まる一分前になんとか終わった。これで安心だ。クラスの角を見てみると和磨が必死でノートを写していたがもう間に合わない。だって先生が教室に入ってきてからだ。いままで騒がしかったクラスが急に静かになった。僕らの学級では『先生が来たら一旦話すのを中止する』という掟があり破ったものは放課後一人で教室掃除だ。

和磨は宿題が忘れたのがばれて先生から酷く怒られていた。

（普通あそこまで怒るか……？）

と疑問に思うほどだった。まあ和磨は結構宿題忘れてるからな……きつといままでの分が爆発したんだろう。結局授業の半分は説教で潰れてた。まあ僕はあまり勉強熱心なほうでは無いのでありがたい事だが。

午前の授業が終わり、昼飯の時間になった。僕らの通ってる学校は私立なので給食というものが無い。ご飯を食べたけりゃ弁当を持っ

てくるか学食に行くか、だ。僕達は前者だ。昼休みになると和磨と夏花咲と一緒にご飯を食べる。僕はみんなで雑談をしながらご飯を食べる事が好きだった。

だがその幸せな時間が終わると午後からは地獄だ。眠くなってしまう。しかし寝る事はできない。午後の授業は物理と地理だった。物理はともかく、地理は寝たら終了してしまう。地理の先生は教科書に載ってない事や合間の雑談ですらテストにしてしまう。地理はなにがなんでも起きていなければならない……

だが気がつくとも僕の視線は、前で必死にノートを写している夏花咲に向いてた。意識をしないでぼんやりしているといつのまにか夏花咲に向いている。そう僕は目の前に居る少女に淡い恋心を抱いていた。僕は夏花咲と彼女の関係になるという妄想をしていたがそれは叶わぬ事だろうから……和磨は女の子のプロフィールを集めるのが得意だ。その和磨から聞いた情報のよると夏花咲は隣のクラスの奴が好きだと言う。僕は正直ショックを受けていた。夏花咲が僕の事を好いている、とっていたのだ。僕は勘違いをしていた。僕はその話を聞いた晩あまり眠れなかった記憶がある。いまでも普通に話せていたが聞いた当時はなんとなく話すのが気まづかった。その様子を見て心配してくれた事は僕を余計に苦しませていた。

授業終了のチャイムが鳴り放課後になる。夏花咲は今日は部活らしい。ついでに夏花咲は陸上部のエースだ。まだ春なのに夏の大会に全力で挑むためこのところ毎日部活があるらしい。僕も部活に行こうかな？僕は軽音楽部に入っていてバンドも組んである。僕のパートはギターだ。今日は僕らの練習日じゃ無いが後輩に教えるというのもありだろう、と思い僕は部室に向かっていった。中からはドラムの音やギターの歪んだ音が聞こえる。僕はそのまま部室に入った。部室を使っていたのは一年生だった。僕らはたまにしか教えに来な

いからほとんど独学だろう。僕は二時間ぐらいギターの子とつきつきりで教えて上げた。

僕は教室に戻ってきた。夏花咲はいない。当たり前だ。陸上部が終わるのは三十分後なのだから……僕は夏花咲を待つ事にした。僕は退屈だったので今日出された数学の宿題を解き始めた。今回出た問題は量はそこまで多くないが応用問題だった。僕は数学が好きだった。応用問題とくれば次第にテンションがあがってくる。そのまま問題を解いていった。気がつくとな陸上部が終わってる時間だった。だが夏花咲はまだ帰ってこない。僕は窓から校庭を覗いた。一人で自主練に励んでいる夏花咲がいた。僕は少し様子を見ていたがTimeが遅くなっているような気がした。僕は携帯のストップウォッチで調べてみた。

12、79

13、12

13、08

13、56

やっぱり……Timeが落ちてきている。疲れてきてるんじゃないのか？僕はそう思い自販機でスポドリを買って夏花咲の元へ向かった。

「おい、夏花咲ー！」

僕の声にびっくりしたのだろうか。一瞬ピクツとなってこっちを振り向いた。

「咲良……?」

「帰ろうぜ。お前も疲れてるみたいだし」

そう言って僕はスポドリを手渡す。

「ありがと。そだね、疲れた状態で走っても記録は伸びないもんね」

「そゆこと。じゃあ着替えて来いよ。僕は教室で待ってるから」

そう言って僕は教室へと踵を返したのだった。それから数分もすると夏花咲が帰ってきた。

「それじゃ、帰ろっか」

帰るときも下らない話をして帰った。例えば、

「咲良は何してたの?」

「僕は部活に顔出してたな。それと宿題もちよこつとやっといた」

「へえ、咲良が学校で宿題ね。珍しいじゃん?」

「まあ退屈だったしね」

「先に帰っても良かったんだよ?」

「先に帰って欲しかった?」



「いやそんなことは無いけどね」

みたいに僕の事を聞いてきたり、

「そういえば島田さんが走り高跳びの自己ベストを更新したんだよ！」

「へえ、凄いね。何センチメートルだったの？」

「それがなんと165センチメートルだったのよ！」

「後少しで県の記録超すんじゃない？」

「うわーそうになったらなんか誇らしいね！」

「でも夏花咲が取るわけじゃないけどな」

「咲良は一言多い！」

などと部活の事を話していたり。

そんな事を話していると家に近づいてきた。駅からだ僕の家の方が近いが一応僕と一緒に時は家まで送って行ってる。そんな毎日が幸せだった。『このままの関係を保つ』か『踏み込む』という選択肢を提示されたら僕は『このままの関係を保つ』を選ぶと思う。僕は臆病者だからね……僕って言うよりはみんな臆病者だとも思うが……だが僕は直に選ばなくては行けないということになってしまった。元々夏花咲は男から人気があった。僕が幼馴染じゃなかったらまずこんなポジションにはいないだろう。

最初に言い出したのは和磨だった。和磨が僕にこう言ったのだ。

「俺、玉碎覚悟で宮原に告ってみる」

僕はこの時から選ばされていたのだ。『このままの関係を保つ』か『踏み込む』かということに……最初はただの冗談だと思っていた。しかし和磨は僕との接触を増やし同時に夏花咲にも接触を増やしていった。今三人でいるのは和磨が夏花咲を狙うためだったのだ。

僕にはこの究極の二択を選ばなくてはいけなくなっていたのだ……

## 第一話 どっちの相川だ!?

「俺、玉砕覚悟で宮原に告ってみる」

僕はこの時から選ばされていたのだ。『このままの関係を保つか『踏み込む』かということに……最初はただの冗談だと思っていた。しかし和磨は僕との接触を増やし同時に夏花咲にも接触を増やしていった。今三人でいるのは和磨が夏花咲を狙うためだったのだ。

僕にはこの究極の二択を選ばなくてはいけなくなっていたのだ……

和磨はちゃくちゃくと準備を進めている。何の準備かって？言わなくてもわかるだろう。そう告白の準備だ。今や和磨と僕と夏花咲は三人で仲良しグループと見られてるぐらい仲が良い。しかしこれも和磨の戦略のうちだ。和磨はさりげなく夏花咲とコンタクトを取るための一番の方法だったからだ。少し前までは朝挨拶をしたりご飯と一緒に食べる程度で他はあまり関わらなかった。今は休み時間になると僕達の近くに来て下らない話をしている。正直和磨はやかいだった。クラスの恋愛相談（男だけの）をよく受けていた。和磨はあらゆる情報から除除に攻めて行く。今まで和磨に相談をしたやつのうち失敗したのは三回程度だった。それを今回は自分が駆使している。

現在時刻は夕方

場所は学校から駅までの帰り道

僕は和磨に話があって一緒に帰ることにした

「なあ和磨。告白するのはいつなんだ？」

僕は聞いた。さすがに単刀直入だったかな？でもそれほど気にな  
っていたのだ。

「予定では二ヵ月後には頃合かなと思う」

タイムリミットは二ヵ月後……その間に和磨を妨害し、夏花咲の  
気を僕に向けなくてはならない。正直厳しい。まずは何をすればい  
いんだ？

「その……夏花咲には好きな人がいるんじゃない……」

「相川あいかわのことか？まあ元々玉砕覚悟だし」

なるほどな……それに思わぬ収入があったぞ。相川って言うのか。

「そうなんだ……でも振られたら悲しいだろう？」

「当たり前だ！好きな女子に振られたら当然ショックを受けるだろ  
！でも何事にもチャレンジしなきゃもったいないじゃないか」

「和磨でもショックを受けるんだね？意外だよ」

「あんなあ……俺がショックなんか受けない奴だと思ってたのかよ

……」

「あはは、冗談だって」

「おっと駅着いたぞ」

「そうだね。じゃまた明日。気をつけてね」

「おう！また明日な」

和磨の家は駅のもう少し先にある。当然僕らが帰るときは駅でお別れだ。

僕は決まった。それはこれから取るべき行動だ。明日相川とやらの情報を聞き出そう。まずは恋敵からだ。今の僕は燃えていた。時間が無かったからだ。僕には幼馴染というハンデがある。これがどこまで通用するかが勝負の別れどころだ。

気づくと僕は家に着いていた。考え事をしてると時間は本当にあっという間だな……

ジリジリジリジリジリ……

目覚まし時計が鳴る。もう朝か……五月蠅い……僕は目覚ましを切った。僕はリビングに降りた。用意されている朝食を食べ歯を磨く。そして今日の予定を思い出した。

（そうか、今日相川の情報を集めるんだっけ）

時間を見るといつも出ている時間より遅れていた。まあ遅れていたといっても少しだが……

そしてバッグを持ち出かける。ふと携帯が鳴った。誰からだろう、と思いディスプレイを覗くとそれは夏花咲からだった。

『ごめん。今日体調が悪くて学校にいけないの。プリント配られたら帰りに私の家に持ってきてくれないかな?』

という内容だった。僕は残念に思いながらも少し安心した。これで和磨は今日は夏花咲とコンタクトが取れないからだ。

『了解。風邪?無理しないでゆっくり休んでね?』

送信完了っと。そうか今日は夏花咲は今日休みか……寂しくなるな。僕らはいつも一緒だったからな。夏花咲がいないとぽっかりと空間に穴が開いたような感じがした。

ブウウウウウ　ブウウウウウ

携帯がまた鳴った。夏花咲からだった

『うん、ありがとね』

僕は喜んだ。何故って?そりゃ好きな娘から感謝されたら嬉しいでしょ?

『プリントを渡すだけで感謝されるのも気分がいいね(笑)』

送信つと。もし目の前にいたら返してるだろう言葉を送った。

ブウウウウ　　ブウウウウ

今度の返信は速かった。

『そっちの意味じゃ無いよ……』

今度は訳が分からなかった。そっちって？他に意味があったのか……僕はそれについて悩みながら学校へ向かった。

いつもより速く学校に着いた。黙々と歩いたからだろう。さて情報を集めますか。まずは……そうだな、相川のクラスを探すか。僕は近くに居るルームメイトに早速聞くことにした。

「相川って知ってるか？」

「相川？どっちの相川だ？」

いきなりそうくるか……相川二人もいたのかよ……これはマジで厳しいんじゃないか？いきなり躓た。もうどっちでもいいや。少なくともこいつは相川を二人知ってる。

「取り合えず相川のクラスを教えてくれ」

「確か……そうそうBとDだ」

「BとDか。よし！ありがとう」

僕は早速Bクラスに言った。Bクラスの特徴としては『ヲタクが

多い』と『英語の平均点が悪い』ということだけだ。僕は元々同じクラスだったやつを手招きした。

「どうしたんだ？ 珍しいな」

「うん、少し人探しをしてて。早速だけどこのクラスに相川っていうのいるか？」

「相川？ あいつになにか用なのか？」

「いやそういう訳じゃ無いんだけどね。なんか知ってる情報が欲しいんだけど……」

「相川の情報？ あいつは確か部活には入って無かった気がするなあ。普段は大人しいけどゲームの話をすると途端に目が輝きだすな」

そういつて笑う。

「趣味とかわかる？」

「さすがにそれは知らないよ。俺は男の情報なんてあまりあまり欲しくないからね」

と言って苦笑していた。

するとH Rの始まる時間になっていた。

「ありがとね」

僕は素晴らしい教室へと戻るのだった。



授業はあまり聞いてなかった。考え事をしてたからだ。

一つは夏花咲のことだ。あまり風邪を引かないから夏花咲のことが気になっていた。大丈夫かな、夏花咲？プリントが配られなくても帰りにお見舞いに行こう。そう思った。

もう一つは相川の事だ。まさか二人もいるとは思もしなかった僕にとってはかなりの大ダメージだ……まあ情報を集めたからといってなにも策は無いのだが……取り合えず授業が終わったらDクラスにでも行ってみよう。

授業が終了したチャイムが鳴った。僕はすぐにDクラスに向かった。Dクラスの特徴といえば『真面目なやつが多い』『小テストはいいが定期試験は駄目』とちょっと変わったクラスだ。Bクラス同様同じクラスだったやつを手招きした。

「まさかお前から尋ねてくるとは一体なんのようだ？」

さっきといい今回といい僕が他クラスに行く事は滅多にないのでみんな似たような反応をする。

「このクラスに相川ってやつがいるだろ？」

「ああいるが、それがどうかしたのか？」

「相川がどんな奴なのか教えてくれないか？」

「えっ？なんでいきなり？はっ、お前もしかしてホモに目覚めたのか!？」

「んな訳あるかあああ！」

「ははは冗談だ」

今言った時の目は明らかに冗談の目じゃなかったぞ……

「実は今誰がどの部活に入ってるか調査しててね」

大嘘だ。こんな事言って相手を騙せるわけが無い……

「そうか……相川は確かサッカー部だったと思う。そうそうあいつの特徴としては足が物凄く速いってことかな。あいつこの前の体力測定でクラスで一番速かったんだよねあゝ」

足が速い……これか？ポイントはこの情報は結構価値がでかいぞ。

「そうか。ありがとな！」

「あと、嘘はもっと上手いのをつけよ」

ばれてたのか……まあわかってたけど。

これでわかったぞ！夏花咲の好きな相川はきつとDクラスのほうだ。

こうして僕はなんとかして情報を手に入れた。それから聞き込みをしある程度の情報を入手した

彼の本名は相川 あいかわ 十字 じゅうじ 愛称はクロスと呼ばれてるらしい。

誕生日は199X年 6月12日

元陸上部で入部して三ヶ月で退部。そこからサッカー部に入りメ

キメキと力を付けていったらしい。

50メートルのタイムは5秒92

1500メートルのタイムは4分23秒

スポーツはかなりできるらしいが成績はいつも平均以下らしい

陸上部を辞めた理由は不明

といったところである。今日のところは情報収集だけで終了した。帰りのHRでプリントは配られた。保護者会のプリントだ。僕はそのプリントを綺麗に管理して夏花咲の家に向かった。

ピンポーン

僕は夏花咲の家のインターフォンを鳴らした。

『どちら様でしょうか？』

そのマイクから夏花咲のおばさんの声が聞こえてきた。

「えーと、咲良です。今日配られたプリントを持ってきました。」

『ああ、咲ちゃんね。分かったわ。今扉開けるわね』

少しすると玄関の扉が開いた。

「わざわざありがとね」

「このくらい大丈夫ですよ。それより夏花咲のお見舞いもしたいんですが今大丈夫ですか？」

「お見舞い？ うん大丈夫よ。上がって上がって。夏花咲、咲ちゃん

がお見舞いにきてくれたわよ」

僕は母親に促されてリビングに入った。そこでは夏花咲が座って本を読んでいた。

「大丈夫か、夏花咲？」

「うん。もう平気よ。明日からまた学校に行けるよ」

そして僕達は今日あった事をお互いに話していた。時間はもう六時だ。

「じゃあ僕はそろそろ御暇しますね」

「はい、また来てね、咲ちゃん♪」

おばさんにも挨拶して僕は家に帰った。

## 第一話 どっちの相川だ!?(後書き)

いやゝ小説って難しいですねゝ。展開とか考えるのに物凄く悩んじやいます……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4698u/>

---

恋×陸上×幼馴染

2011年10月9日10時13分発行